



古文餘師
後集之部
三

和6
1810
3



○箴類

○大寶箴



張蘊古

今來古往俯察仰觀惟辟福作君為實難

普天之下主として王公之上に處り土に任て其求る所と貢察と具て其價所と陳是故に恐懼之心日

○箴類

箴類 箴類の文に教誡の辭と綴りて他の非と諷刺して糾と

○大寶箴

此のり唐の二代太宗即位のち張蘊古より官人天子の冲身はとて萬衆の位と守遠より

張蘊古

始中書省の官して言傳に敏く後坐を罹謀

第段 今來古往俯察仰觀惟辟作福為君實難

古往の遠と顧今代の近と交て天理に配り地通に及て觀察する萬國の君ハ二儀の命と受て天地の父母の間に在る子とて人物に至りて一家の長子が諸侯如僕とて悉く愛養するがごとくに一物と損りて一家の福祐と布放し一人身に定まる位と踐逐する成難

主普天之下處王公之上任土貢其所求具

察陳其所倡

天子の富徳ハ普天卒土と我有し是の主

是故に恐懼之心日

に弛邪僻之情轉放豈知や事忽所起禍無妄生

固以聖人受命拯溺亨歸心民因大明私照無至公私親無於

故少一人以天下治天下不以一人奉

禮以其奢樂以其佚防左言而右事出警而入蹕

四時其慘舒二光同其得失故身為之度之律為而

謂勿知無高居何害積小就大

之心日弛邪僻之情轉放豈知事起乎所忽天子の富貴を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

禍生乎無妄天子の富貴を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

固以聖人受命拯溺亨天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

屯歸罪於已因心於民大明無私照至公無天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

私親天下を治むるに天命に係り。君の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

故以一人治天下不以天下天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

奉一人天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

禮以禁其奢樂以防其佚左天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

言而右事出警而入蹕天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

四時調其慘舒二光同其得失故身為之度天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

而聲為之律天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

謂勿知無高居何害積小就大天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

段勿謂無知居高聽卑勿謂天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

何害積小就大天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

大寶箴天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

大寶箴天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

大寶箴天子の徳を極め其威光熾して萬種自由を爲す。恐

古文鏡師

卷之三

大寶箴

一

樂不可極 樂極生哀 欲不可縱 縱欲成災

九重之內に壯む

居所ハ膝と容に

不彼昏く知不

其臺と瑣して其室

と瓊にも於而

八珍と前に羅

食と所ハ口に適

過不唯狂

念無其糟と丘

内色に荒し勿外

會に荒し勿得難

貨と貴し勿亡國

の音と聽し勿

内荒る人ハ人の性

伐外荒る人ハ人の心

と蕩る得難之貨

移亡國之音ハ

淫

我と尊と謂て賢に

傲と慢と謂て

我と智と謂て

謙と拒已に矜

樂不可極 樂極生哀 欲不可縱 縱欲成災

九重於内所居不過容

膝彼昏不知瑣其臺而瓊其室

天子の安居する所ハ膝と容のみに止り外ハ不用天子の威光

と具する所の莊なり古先聖王の教に著と楚む此樂のなりとも

天子の安居する所ハ膝と容のみに止り外ハ不用天子の威光

天子の安居する所ハ膝と容のみに止り外ハ不用天子の威光

羅八珍於前所食不過適口唯狂罔念其在

糟而池其酒

勿内荒於色勿

外荒於禽勿貴難得貨勿聽亡國音

内荒伐

人性外荒蕩人心難得之貨移亡國之音淫

尊而傲賢慢士勿謂我智而拒諫矜己

勿謂我

我と尊と謂て賢に

傲と慢と謂て

我と智と謂て

謙と拒已に矜

之と聞り夏后饋
に據類に起し亦魏
帝ハ裾と牽ぎも止
小し有

彼反側と安を
春陽秋露の如うて
魏魏蕩蕩漢
高の太度と恢

茲庶事と撫し
薄履深に臨
如戰戰慄慄
周文の小心と用

詩之識不知不書
之偏無黨無彼此
と胸臆に一う好
惡と心腹に損
衆棄而後刑
と加し衆悦で而
後に賞と行

其強と弱し其
亂と治其屈
と伸し其枉と
直

聞之夏后據饋類起亦

有魏帝牽裾不止夏后ハ禹王の。禹ハ天下の賢士とし、

側如春陽秋露魏魏蕩蕩恢漢高太度安ん

撫茲庶事如履薄臨深戰戰慄慄用周文小

心万機の公道と稱り、大事をさすこと、謹んで、若一念の差

詩之不識不知

書之無偏無黨一彼此於胸臆損好惡於心

想古文王の私に、下射と、おぼせんと、い志す。天の、不、頂、さ、が、如、

衆棄而後加刑衆悦而後行賞

弱其強而治

其亂伸其屈而直其枉

直

故曰如衡如石之
如物之定者以
以不物之懸者
輕重自見

水之如鏡之如
物之示情以
不物之鑒者
妍蚩自生

渾渾而濁勿
皎皎而清勿
汶汶而闇勿
察察而明勿

見流目之蔽雖
未形視之難
耳之塞雖無
聽而於於

心之湛然之域
精神之至道
精之游之扣者
洪纖之應響
效之酌者淺
淡之隨皆盈

天之經地之
寧王之貞四時
不言而代序
萬物無言

故曰如衡如石不
伸也。又物不在其誠正直にありて、故曰如衡如石不

定物以限物之懸者輕重自見
秤の衡に物を懸
輕重の鐘石

如水如鏡不示物以情物
に應じ、他の是非善惡一毫も不違露見するの、人に依りていなり。

之鑒者妍蚩自生
天子の心は水の静りて物の象と云
に似、明澄に塵をけし、物と思は

勿渾渾而濁
物の象と云
勿渾渾而濁

勿汶汶而闇
物の象と云
勿汶汶而闇

勿察察而明
物の象と云
勿察察而明

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

於無敵
見、天の理を、目と蓋て眼にありて
見、天の理を、目と蓋て眼にありて

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

雖見流蔽自而視於未形
雖見流蔽自而視於未形

帝力して天下の和平

而而而

吾王亂と撥て我に

智力と以て民其威

と懼て未其德に

懷未困

我皇運と撫て扇

に淳風と以て民其

始に懷て未其終と

保未困

爰に金鏡と述て神

と窮聖と盡人と使

に心と以て言に應

て行て以て

治體と包括て詞令

と抑揚と天下に公

有羅と開て祝と起

琴と撥て詩と命

一日二日茲と念

茲に有

唯人の召所天自

之と祐諍臣直と

司とて敢て前疑

と告

行て自ら天より

若張蓋古しく

正直

而化成豈知帝力而天下和平

此はの安けりて帝王の公正自直なり。天の言ふれは恵

の功不伐ひてははるる。太宗より泰国の諸侯王

以智力民懼其威未懷其德

打夷らふた智謀兵力と専用らひて天下の民

運扇以淳風民懷其始未保其終

立あつてははるる。如斯かるは終つては一日の過通り懷

爰述金鏡窮神盡

聖使人以心應言以行

一人有慶開羅起祝

包括治體抑揚詞令天下為公

一人有慶開羅起祝

援琴命詩一日二日念茲在茲

接詩と命とつて詩とつて

と安んがの志とつて

唯人所召自天祐之諍臣司直敢告前疑

行て自ら天より

若張蓋古しく

正直

○視の箴

○視箴

此視箴の発しり。顔回が孔子に同じに道とむ。非れ勿聽。非れ勿言。非れ勿動。と示す。人をして視聽言動の四勿といふ。これ伊先生に至極の妙言と感悦せしむ。自ら他修行の要に具ん。此視の箴と作す。○此に於ては、

程正叔

程正叔

氏の程。名ハ順。字ハ正叔。伊先生と号す。河南の人なり。宋の代に道とす。人に與へ。孟子及びの大賢なり。程正叔

心今本虚應物無迹操之有要

○要の

視之則爲

視爲之則

前に蔽交する其

蔽交於前其中

則遷

之と外に制を以

制之於外以

安其内

己に克て禮に復

克己復禮久而誠矣

○聽の箴

○聽箴

人有秉彝本乎天性

知に誘物に化

知誘物化

視箴 聽箴

遂亡其正
何の善を以て其の念動ふして、遂に其の正を失ふ。遂に其の念動ふして、遂に其の正を失ふ。遂に其の念動ふして、遂に其の正を失ふ。

遂に其正と亡

卓彼先覺知止有定

物に於て其の天性と知る。至善の天性と知る。至善の天性と知る。

知て定し有

閑邪存誠

閑邪存誠。閑邪存誠。閑邪存誠。

非の閑誠と存

非禮勿聽

非禮勿聽。非禮勿聽。非禮勿聽。

言の箴

言の箴

言の箴。言の箴。言の箴。

人心之動

人心之動因言以宣發禁躁妄

人の心の動因言以宣發禁躁妄。人の心の動因言以宣發禁躁妄。

因以宣發

内斯靜專知是樞機

内斯靜專知是樞機。内斯靜專知是樞機。

内斯靜專

興戎出好

興戎出好。興戎出好。興戎出好。

戎興好と出

吉凶榮辱

吉凶榮辱惟其所

吉凶榮辱惟其所。吉凶榮辱惟其所。

所の易に傷

召傷易則誕

召傷易則誕。召傷易則誕。召傷易則誕。

煩傷

傷煩則支

傷煩則支。傷煩則支。傷煩則支。

已肆

已肆物忤出悖來違

忤出に悖來に違

法に非んば道不

非法不道欽哉訓辭

非法不道欽哉訓辭。非法不道欽哉訓辭。

欽哉訓辭

動の箴

動の箴

動の箴。動の箴。動の箴。

哲人の幾と知之

哲人知幾誠之於思

哲人知幾誠之於思。哲人知幾誠之於思。

思に誠に於

言の箴

動の箴

志士勵行

志士之行と勵之と爲に守る。志士は一大事と知るに、悪と爲りて専ら善と爲らん。其行と且夕勵勤と爲らん。道に篤志を盡し、人を行連せんとす。勤めんとす。允正に達す。

守之於爲。聖賢に存んて、志を盡し、其行と且夕勵勤と爲らん。道に篤志を盡し、人を行連せんとす。勤めんとす。允正に達す。

順理則裕。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

欲惟危。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

造次克念。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

兢自持。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

習與性成。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

聖賢歸。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

銘類。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

陋室銘。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

劉禹錫。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

山不在高。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

有則名。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

水不在深。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

龍則靈。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

斯是陋室。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

惟吾德馨。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

苔痕上階綠。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

艸色入簾青。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

談笑有鴻儒。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。天の道に順じれば、裕を得ん。

以素琴と調金經
と関可絲竹之耳
と亂無案牘之形
と勞と無

南陽の諸葛廬西
蜀子雲亭孔子云
有之 何の陋きと

此に於ては、自丁の段三、兩居に
此に於ては、自丁の段三、兩居に
此に於ては、自丁の段三、兩居に

絲竹之亂耳無案牘之勞形
訪人か、其寂然と、其素琴

と調と友と。此に於ては、金經と繡と、佛の妙れと、説閑と、心と、
とて他の至ま、人へ、妓女、管絃と、催し、耳と、乱れ、我に

廬西蜀子雲亭孔子云何陋之有
諸葛、姓名、孔明、三國大乱の時

才と、韜身と、全せりて、南陽に、草屋と、架隠、
○楊雄字の子雲、大玄、後と、書、
身、陋に、
少道之不行と、歎、
と、徳ある者、其、
徳の馨、

○克己の銘

凡厥有生、氣均、
不仁、我則、
有己

物我既に立て、私
と町畦と、鳥勝心
横に發して、擾擾
とで齊く、不

○克己銘
此銘の、
克己の銘と、
○華易私欲の大敵に、
呂與叔、
凡有清の中、
有己、
凡有清の中、
有己、
凡有清の中、
有己、

凡厥有生均氣同體胡為不仁我則
疑向と、
段、
段、
段、

物我既に立て私為町畦勝心横發
此に於ては、
此に於ては、
此に於ては、

擾擾不齊
此に於ては、
此に於ては、
此に於ては、

己の克己の義、
己の克己の義、
己の克己の義、

大人誠と存く心
に帝の則と見初
に各驕の我彘賊
作無

志以帥と為氣
と卒徒と為辭と
天に奉り誰敢
て予と侮ん

日戰日徠私に勝
徳と室昔へ寇讎
為今へ則ら臣僕
かり

其未克未に方て
吾室廬と窘し婦
姑勃磔と安んを厭
餘と取ん

亦既に之と克す
達の洞然と八荒
皆吾圍に在

孰曰天下吾仁
歸不養病疾痛
舉吾身に切かり

善事の成りて勝心は推倒して我勝らんをせしむる心は
の秘なり。故に此の如く推倒して我勝らんをせしむる心は

大人存誠心見帝則初無各驕作我彘賊

○大人は聖徳の人と○各は物と借して善とせしむる心は
○驕は驕りて驕る心と○我は我を勝る心と○初は初め

大人は聖徳を成りて常に天帝の則と自ら見せしむる心は
の進んで各を悪くし各を驕る心は此の病と不懐ゆるに彘賊の苗と

害するがごとくに本心を傷損する私意を微塵も
傷損する私意を微塵も

奉辭于天誰敢侮予

天今に率順天の命と奉りて予と侮ん

日戰日徠私に勝

日徠勝私室徳昔為寇讎今則臣僕

其未克未に方て

方其未克窘吾室廬婦姑勃磔

安取厭餘

亦既に之と克す

亦既に之と克す

亦既に之と克す

八荒皆在吾圍

孰曰天下吾仁

歸不養病疾痛

一日も焉に至る吾
事に非ざる事莫
顔何人ぞ哉之と
啼くは則是なり

歸すは仁也○為仁則徳也徳と取ては仁の徳の徳と
不取と不取は徳と及べば何の徳とあらん天下皆同一徳なり
徳と不取は徳と一なり
一日に至る焉非吾事
顔何人哉啼之則是

克己の徳と履運するは我天徳を具足する仁中の一なり外に
古昔とを同じふ徳也彼顔回何人ぞか知り聖徳の徳孔子に
至りて克己の徳と履運するは仁中の一なり外に孔子は
至りて専ら啼きたるは即孔子の徳と履運するは仁中の一なり

○西の銘

張子厚

乾父と稱坤と母
稱予茲に藐焉と
り乃ら混然中處

○西銘 又東の銘と云ふなり此化者張子厚といふなり動靜の二
動靜の二つは又横渠先生と号し宋の神宗皇帝位の年遷寧元年
張子厚は洛陽に居りて西と東に分りて西は陰陽の二つ
乾稱父坤稱母子茲藐焉乃混然中處

故之に天地之塞
五其體たり天地
之帥は吾其性なり

故天地之塞吾其體天地之帥吾
其性

民吾同胞物吾
與也大君者吾父
母の宗子なり其
大臣の宗子之家
相也

大君者吾父母宗子其大臣宗子之家相也

動くと主するは性なり我性は天地の性なり
輝き性命の全体によく通徹するなり
大君者吾父母宗子其大臣宗子之家相也
三公平相に登庸するなり一家の宗族の家者なり

高年と尊ハ其長と
長シテ所以カ孤
弱ニ慈ル吾幼と
幼シテ所以カ

聖ハ其徳と合テ
賢ハ其秀と也

凡天下の疲癯
殘疾惇獨鰥寡
皆吾兄弟顛連
ニ而告ト無リ

時に于之と保ハ
子之翼る也樂デ

且憂不ハ孝に純
カ者也

違と悖徳ト曰
害と賊ト曰
惡と濟者ハ不才
カ其形と踐者
ハ惟肖也

化と知ると則善
其事と述神と窮
其則善其志と

屋漏も愧不と泰

尊高年所以長其長慈孤弱所以幼吾幼

同胞の人ふれんば年老るとも我家人に老るとも通
と同一と又幼少とも慈孤獨とも又母をば小兒ハ我家人にあり
澤ものといわれんばその孤弱なりとも是も
我家人の小兒と憐むるは是れ也

聖其合徳賢其秀也

凡天下の疲癯殘疾惇獨鰥寡皆吾兄弟顛連

而無告也

○疲癯ハ老ておとろけたりて妻の寡ハ老ておとろけたりて子の翼るハ老ておとろけたりて
○惇獨ハ老ておとろけたりて子の翼るハ老ておとろけたりて子の翼るハ老ておとろけたりて
○鰥寡ハ老ておとろけたりて子の翼るハ老ておとろけたりて子の翼るハ老ておとろけたりて
○無告ハ老ておとろけたりて子の翼るハ老ておとろけたりて子の翼るハ老ておとろけたりて

也樂日不憂純乎孝者也

○純ハ孝の至極なり
○樂ハ孝の至極なり
○日不憂ハ孝の至極なり
○純乎孝者ハ孝の至極なり

賊濟惡者不才其踐形者惟肖也

○賊ハ害の至極なり
○濟ハ害の至極なり
○惡者ハ害の至極なり
○不才ハ害の至極なり
○踐形者ハ害の至極なり
○惟肖也ハ害の至極なり

知化則善述其事窮

神則善繼其志

不愧

無と爲心と存
性と養の懈に匪
爲酒と惡の崇伯
子之養と顧る

英才と育るの類封
人之類と錫を勞
と勉不而豫と底
舜の其功也

屋漏爲無忝存心養性爲匪懈惡旨酒崇伯

子之顧養 屋漏といふは西北の角の屋上より意をひきかきて他人のこころをみわたすことなり。本心と不妄入へて道に専らに養ふことなり。

育英才類封 古昔崇伯の子の爲る旨酒と飲。是は武王の時に於て武王の臣にして武王の武妻の死後にして武王の國を治る。若くは武王の武妻の死後にして武王の國を治る。若くは武王の武妻の死後にして武王の國を治る。若くは武王の武妻の死後にして武王の國を治る。

人之錫類不弛勞而底豫舜其功也 英才といふは才徳の人のことなり。類封といふは天子の命を以て封爵を授かることなり。錫類といふは天子の命を以て封爵を授かることなり。不弛といふは弛ゆることなし。勞といふは勞することなし。底豫といふは底にして豫ることなし。舜其功也といふは舜の功なり。

無所逃而待烹者申生其恭也 逃といふは逃るることなし。待烹といふは待てて烹るることなし。申生其恭也といふは申生の恭なり。

歸全者參乎勇於從而順令者伯奇也 歸全者といふは歸して全ることなし。參乎勇於從而順令者といふは參乎の勇を以て從而順令することなし。伯奇也といふは伯奇の事なり。

富貴福澤將厚吾之 富貴福澤といふは富貴福澤のことなり。將厚吾之といふは將て厚むることなし。

生貧賤憂戚庸玉女於成也 生貧賤憂戚庸玉女於成也といふは生貧賤憂戚庸玉女於成也の事なり。

存吾順事没吾寧也 存吾順事没吾寧也といふは存吾順事没吾寧也の事なり。

逃る所無而烹と
待者申生の其
恭也

其受に體し全と歸
者參乎從に勇
令に順者伯奇也

富貴福澤將に吾
之生を厚むと將貧
賤憂戚庸女と成
に玉に玉と成也

存ももたの吾順事
没ももたの吾寧事

存吾順事没吾寧也

西銘

九

東の銘張子厚

戲言也。思慮出。戲動也。謀。作。聲。發。四支。見。已。非。謂。不。明。也。人。己。疑。無。也。欲。不。能。也。

過言ハ心ニ非過動ハ誠ニ非戲失其四體ニ膠迷。こが當然と謂自ら証也他人の己に従んくと欲ん人証也。

東銘 張子厚

戲言出於思也。戲動作於謀也。發於戲見乎四支。謂非己心不明也。欲人無己疑不能也。

戲言ハ心ニ非過動ハ誠ニ非戲失其四體ニ膠迷。こが當然と謂自ら証也他人の己に従んくと欲ん人証也。

過言ハ心ニ非過動ハ誠ニ非戲失其四體ニ膠迷。こが當然と謂自ら証也他人の己に従んくと欲ん人証也。

戲失於思者自証為己誠不知戒其出汝者反歸咎其不出汝者長傲且遂非不知孰甚焉。

古硯銘 唐子西

硯筆墨與葦氣類也。出處相近。任用寵遇。

古硯銘 唐子西

硯筆墨與葦氣類也。出處相近。任用寵遇。

古硯銘 唐子西

硯筆墨與葦氣類也。出處相近。任用寵遇。

古硯銘 唐子西

硯筆墨與葦氣類也。出處相近。任用寵遇。

古硯銘 唐子西

硯筆墨與葦氣類也。出處相近。任用寵遇。

古硯銘 唐子西

硯筆墨與葦氣類也。出處相近。任用寵遇。

古硯銘 唐子西

硯筆墨與葦氣類也。出處相近。任用寵遇。

古硯銘 唐子西

硯筆墨與葦氣類也。出處相近。任用寵遇。

獨壽天相近不

筆之壽日以以計墨之壽月以以計硯之壽世

以計其故何也

其體為筆之最

銳墨之之次硯

鈍者也豈鈍者壽

者而銳者天乎

非乎也

其用為筆之最

有用為筆之最

動墨之之次硯

靜者也豈靜者

者而動者天乎

非乎也

或曰壽天數也

鈍動靜之制也

所非借令筆不

相近也 此言天與地相近也

獨壽天不相近也 此言天與地不相近也

筆之壽以日計墨之壽以月計硯之壽以世計其故何也 此言筆之壽以日計墨之壽以月計硯之壽以世計其故何也

其體為筆之最 此言筆之體為筆之最

銳墨之之次硯 此言墨之體為墨之最

鈍者也豈鈍者壽 此言硯之體為硯之最

者而銳者天乎 此言天與地相近也

非乎也 此言天與地不相近也

其用為筆之最 此言筆之體為筆之最

有用為筆之最 此言墨之體為墨之最

動墨之之次硯 此言硯之體為硯之最

靜者也豈靜者 此言天與地相近也

者而動者天乎 此言天與地不相近也

非乎也 此言天與地相近也

或曰壽天數也 此言鈍動靜之制也

鈍動靜之制也 此言所非借令筆不

所非借令筆不 此言與久遠不能與硯久遠也

與久遠不能與硯久遠也 此言吾知其不能與硯久遠也

吾知其不能與硯久遠也 此言今唐子西論也

今唐子西論也 此言或人難也

或人難也 此言吾知其不能與硯久遠也

しと知ぬ也
然雖此と爲彼と
爲勿也

銘に曰銳と能不因
鈍と以體爲動
能不以用爲惟其
然是と以能永年

○文の類

○北山の移文

と彼の天より定るるのわかれの鈍ふらぐまじき生地
あはれふらぐまじき生地の鈍ふらぐまじき生地
人の寿命に於て。有る非は。今ある天運ふらぐまじき
まじきにかとまじきも延より。延より。無益
段七 然

寧爲此勿爲彼也
或人の言言最然也。我が心も。唯彼の
銘曰不能銳因以鈍爲體

不能動因以靜爲用惟其然是以能永年

銘をた生質するふらぐまじき
體用とすれまじきと怪ても長久秘結するは是死の徳也

○文類
文といふ文字と書つたけり。一語の長短をわかれ。其
中ふらぐまじき。一語の長短をわかれ。其
ら。一語の長短をわかれ。其

○北山移文
北山の會稽の北にあり山あり。移文といふ自身
すにまじきと移文といふ。○此文のつた。周顒字彦倫とす。世と移
と傳り北山に居たり。一語の長短をわかれ。其

孔德璋

鍾山之英艸堂之靈
煙と驛路に馳移と
山庭に勒

夫以耿介
俗と拔て標肅洒
白雲と度て以方
直に上吾方に之と
知ぬ之而矣

鍾山之英艸堂之靈馳煙驛路勒

移山庭
周顒が北山に居たり。一語の長短をわかれ。其

夫以耿介
俗と拔て標肅洒

介拔俗之標肅洒出塵之想度白雲以方潔

于青雲而直上吾方知之矣

と拔標も肅洒も除く。胸中の思想も深く清浄なると
度高天の雲も直上する。無凡れ俗者として感

若其物表に亭亭と霞外に皎皎と千金を芥うと不萬乘と履うて其脱が如し

鳳吹と洛浦に聞新歌に延瀨に固に亦焉有

作迹と廻心深或先貞而後黷何其謬哉嗚呼尚生存不仲氏既往山阿寂寥千載誰賞世に周子とつす有雋俗之士り既に文に既博亦玄に亦史

若其亭亭物表皎皎霞外芥千金而不矜履鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

萬乘其如脱鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

延瀨固亦有焉鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

聞鳳吹於洛浦值新歌於鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

豈期始終參差蒼黃反鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

覆淚翟子之悲慟朱公之哭鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

乍廻迹以鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

心深或先貞而後黷鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

何其謬哉嗚呼尚鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

生不存仲氏既往山阿寥鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

千載誰賞鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

世有周子雋俗之士既文鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

既博亦玄亦史鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

然而學遁東魯習鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

竊吹卅堂濫鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

隱南郭鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

然而遁鳳吹の志すも其の皎々たるを霞の外に塵表に表す千金を芥すの如く

北山移文

爾乃眉席の次に
軒袂筵上に簪艾
製と焚て荷衣と裂
塵容と抗俗状と走

風雲悽
憤りと帶石泉咽
下下に愴々林巒

其金章と紐黑綬
と縮に至り屬城
之雄に跨百里之

海甸に張妙譽と
浙右に馳
道帙長久に擯

法筵久く埋る敵
朴誼置賢慮と
犯一牒訴倥偬

琴歌既に斷酒
賦續無常に結
課に綱繆毎に折

獄と紛綸
張趙と往圖に籠
卓魯と前錄に架

魯於前錄
圖と架籠て此人の

張趙と往圖に籠
卓魯と前錄に架

爾乃眉軒席次袂
簪艾製而裂荷衣抗塵容而走俗状

風雲悽
憤りと帶石泉咽

下下に愴々林巒
其金章と紐黑綬

と縮に至り屬城
之雄に跨百里之

海甸に張妙譽と
浙右に馳

道帙長久に擯
法筵久く埋る敵

朴誼置賢慮と
犯一牒訴倥偬

琴歌既に斷酒
賦續無常に結

課に綱繆毎に折
獄と紛綸

張趙と往圖に籠
卓魯と前錄に架

魯於前錄
圖と架籠て此人の

張趙と往圖に籠
卓魯と前錄に架

魯於前錄
圖と架籠て此人の

張趙と往圖に籠
卓魯と前錄に架

魯於前錄
圖と架籠て此人の

張趙と往圖に籠
卓魯と前錄に架

魯於前錄
圖と架籠て此人の

張趙と往圖に籠
卓魯と前錄に架

魯於前錄
圖と架籠て此人の

張趙と往圖に籠
卓魯と前錄に架

魯於前錄
圖と架籠て此人の

○古戰場と手文

李華

浩浩乎平沙無復見人河
水榮帶山糾紛

悲日曠蓬斷州枯
凍若霜晨鳥飛下不獸挺

亭の長余に告て

往に鬼哭と天陰則
聞心と傷と

吾聞夫齋魏の徭
戍荆韓の口口墓

沙州晨に牧河水
夜渡地闊天長

○弔古戰場文

唐の世の李華とつる人或時舊古の戰場
蕭條原野とたり人居するも
戰死と屍と手とつるも

李華

此文の作者なり
李の姓名ハ華

浩浩乎平沙無復見人河

水榮帶山糾紛

悲日曠蓬斷州枯
凍若霜晨鳥飛下不獸挺

亭の長余に告て

往に鬼哭と天陰則

戰場也常覆二軍往往鬼哭天陰則聞傷心

哉秦歟漢歟將近代歟

吾聞夫齋魏の徭戍荆韓の口口墓

沙州晨に牧河水夜渡地闊天長

歸路と知不身と鋒又と寄臆と

長不知歸路寄身鋒又臆誰訴

長不知歸路寄身鋒又臆誰訴

長不知歸路寄身鋒又臆誰訴

長不知歸路寄身鋒又臆誰訴

誰か許へん

秦漢、還四夷に

多事、中州耗

無(而)

古、稱戎夏王の

師、抗、文教宣

失、武臣奇

異、有王道

迂闊、爲

莫(而)

嗚呼、噫嘻、五想、天

北風、漠、振、胡、使

と伺ふ

主將、敵に、驕、斯門

戦、受、野、旗

旗、と、登、川、組

練、と、回、と

法、重、心、駭、威、尊

上、で、命、賤、利、鉄

骨、と、穿、驚、沙、面、に

主、客、相、搏、山、川

震、眩、聲、折、江、河、と

折、勢、雷、電、と、崩

至若と窮陰疑閉

敗れし志で平ゆの作す州と合て夜に敵の地を責むる人の水は

前中れ地の網と浩して方角も不知古らもきくはて帰路も不知

悲愁もしと誰に許し胸と晴とまじん 秦漢而還多事四夷

中州耗斃無世無之 秦漢の代より以後相續て四方の

静かしく代りて 古稱戎夏不抗王師文教失宣

武臣用奇奇兵有異於仁義王道迂闊而莫

爲 古戎も中夏も共に普天の下として王臣かたも天子の師に敵する

道徳至治の教誨を大に異するも王道に當せし不應しめり

兵伺便 嗚呼吾以敵の想に冬の北風冽く匈奴も中国との

主將驕敵斯門受戰野登旌旗川回組練

一憤と驕保小敵も不可慢の誠と思ふ也斯門必死の戦と身

に文師の旌旗と推登野大(河)の組練とまじり

士卒と寒冷の水に進入壘にせしと下りたり

法重心 駭威尊命賤利鉄穿骨驚沙入面

軍中の命令と重して一毫の仕損も不赦と定る也士卒の心若過

るが駭き動馳入る戦は胡国の弓に勝る也如雨の鉄甲と抜骨

體に透入徑はれりも打踰戦つんとするも寒

震眩聲折江河勢崩雷電 兩陣渡會すてに雷哥と轟

勢激疾かるし雷電も崩るとり

至若と窮陰疑閉

主客相搏山川

震眩聲折江河勢崩雷電

至若と窮陰疑閉

主客相搏山川

震眩聲折江河勢崩雷電

海隅積雪沒脛堅冰鬚在

鷲鳥巢休征馬

脚蹶繒纒溫

當此苦寒天假強胡

憑陵殺氣以相剪屠

徑截輜重橫攻士卒都尉新降將軍復沒

屍填巨港之岸

血滿長城之窟無貴無賤同為枯骨可勝言

言可哉

鼓衰力盡矢竭

弦絕白刃交寶

刀折兩軍感生

死決

身夷狄戰矣哉骨暴沙礫

降矣哉終

列海隅積雪沒脛堅冰在鬚

鷲鳥巢休征馬脚蹶繒纒無溫墮指裂膚

當此苦寒天假強胡

憑陵殺氣以相剪屠

徑截輜重橫攻士卒都尉新降將軍復沒

屍填巨港之岸

血滿長城之窟無貴無賤同為枯骨可勝言

言可哉

鼓衰力盡矢竭

弦絕白刃交寶

刀折兩軍感生

古文餘節

卷之三 千古戰場文

二二五

鳥聲無兮山寂寂

夜正長兮風淅淅

魂魄結兮天沈沈

鬼神聚兮雲霧霧

日光寒兮州短月

色苦兮霜白

心傷兮目有耶

是の如かる

之牧用趙卒大破

林胡開地千里遁

逃匈奴

漢天下傾て財

彈力痛人而巳其

在多

吾之と聞牧趙の

卒と用て大に林

胡と破て地と開

千里匈奴遁

逃

漢天下傾て財

彈力痛人而巳其

在多

周逐獫狁北至太

原

既城胡方全師而

還飲至策勳

和樂且閑穆穆

棣棣君臣之間

秦長城起て海

關荼毒生靈萬里

朱殷

秦起長城竟海為

關荼毒生靈萬里

朱殷

秦長城起て海

關荼毒生靈萬里

朱殷

秦起長城竟海為

關荼毒生靈萬里

朱殷

秦長城起て海

關荼毒生靈萬里

一〇七 餘而 一〇八 二三 一〇九

嗚呼噫嘻時耶命耶從古如
耶古從一斯の
如一之と爲と奈
何守四夷に在

住ちて繼て流流運電
定まり

嗚呼噫嘻時耶命耶從古如
斯爲之奈何守在四夷
民死を以て不可勝計に
如北狄の代不止に天下の
天子に義を以て行はば
天下に平を以て行はば

○頌の類

○聖主得賢臣と得
の頌

○頌類

頌類 頌といふは、有徳人と他より勲を
徳と文句の中、形容して頌美するといふ
也。

○聖主得賢臣頌

前漢の宣帝のとき魏相丙吉が
賢臣と登庸するを得た
るを聖主といひ賢臣といひ
稱美して此頌と作らる

王子淵

夫梅と荷と被
者、與に純綿之
麗密と道難

夫荷旗被毳者難與道純綿之麗密

王子淵

此頌と云ふは、
此王名の褒字、王子淵

美藜含糗者不足與論太牢之滋味
之滋味と論
足不

美藜含糗者不足與論太牢之滋味

今臣僻在西蜀
在窮巷之中長
蓬茨之下に長

今臣僻在西蜀

游觀廣覽之智
無願至愚極
陋之累ひ有以て

生於窮巷之中長於蓬茨之下
無有游觀廣覽
之知願有至愚極陋之累不足以塞厚望應

明旨雖然敢不略陳其愚心而抒情素

應厚望と塞明旨に
雖も敢て畧其愚

明旨雖然敢不略陳其愚心而抒情素

心と陳て情素と
行不や前

記曰恭惟
春秋の法五始之要
已と審りて統と
正に在而已

夫賢者國家之
器用也任所
賢る則越舍省
て功の施し普
器用利する則力と
用少く以て效と
就く衆

故へに工人之鈍
器と用る也筋と
勞し骨と苦り
終日硃硃

巧冶の干將之樸
鑄に至に及て清
水其鋒と淬越砥
其錐と斂

水蛟龍と斷陸
犀革と剽忽若
簪之塵塗と泛る
若此の如かるべ
則離婁と使繩
と督公輸とて墨
と削使便

崇臺五層延表百

抱する其の文をうらやまうと厚く望みんば其の責と重き用ふ充る
み不足と。勅旨と當りて出されんば勅令に應ず奉らる
に不足。然雖君令の重と此より重し。臣が愚也
かる心の長と陳て朴素ふ飾ふる情と伸すんや
段二記曰恭

惟春秋法五始之要在乎審已正統而已
改元の年。春。王。正月。胡。聖人の記され。春秋經の法の要。審。己。正。統。而已。
即位。ん。と。の。う。ら。や。ま。う。と。古。聖人の記され。春秋經の法の要。審。己。正。統。而已。
多し。僅。ふ。五。始。と。定。ま。す。ん。ば。天子。自。己。の本。心。と。審。ま。す。

夫賢者國家之器
用也所任賢則越舍省而功施普器用利則
其位と正く踐りて外事ありしと
段三夫賢者國家之器

用力少而就效衆
具のりてくつてつて。○。其。器。と。家。に。用。て。可。め
國老のく賢るるは才ある。賢者と進ん。行はる。才の者と舍。事
功と施し布く舟く。後用の外
と。の。か。か。り。の。依。り。て。命。じ。り。故。工。人。之。用。鈍。器

也勞筋苦骨終日硃硃
道具と用る。良匠人。筋。骨。と。苦。り
す。の。う。ら。や。ま。う。と。世。の。器。物。出。さ。す。○。愚
に不肖のくを復くに用て事と謀らしむ。及至巧冶

鑄干將之樸清水淬其鋒越砥斂其錐
形治が良樸と。干將の劍と造るに至て。水に劍の
鋒と淬。鑿とつて。錐。マ。カ。り。て。越。砥。磨。り。塵。課。り。て。斂。り。

水斷蛟龍陸剽犀革忽若簪之塵塗如此則
水。蛟。龍。を。斷。り。陸。上。に。犀。革。を。剽。り。忽。然。若。し。簪。の。塵。塗。と。泛。る。如。此。の。如。し。則。ち。離。婁。と。使。繩。と。督。公。輸。と。て。墨。と。削。使。便。

使離婁督繩公輸削墨
干將の利斂りて用る
と。水。中。で。蛟。龍。の。鱗。を。削。り。

雖崇臺五層延表百丈而不溷者工

之受寬裕之路と開て以天下之英俊

と延

夫智と揚賢と附者

へ必仁策と建遠

索士と求者へ必

伯迹と樹

昔周公躬握之勞

躬故有匡空

之隆

齊の桓庭燎之禮

設故有匡合

の功有

此に由て之を觀べ

人に君する者へ賢と

求ると勤て人と

得ふ逸と

人臣も亦然昔賢者

之未遇に遭未也事

と圖策と用不悞

君其謀と上其

誠と陳見

信と然と進仕

效と施と得不

斥逐も又其愆も

非困

是故に伊尹の鼎俎

に勤大公の鼓刀に

困百里の自鬻

天下之英俊也

賢人君子の聖訓の海内と云ふは其の佐する者

夫揚智附賢者必建仁策索遠

求士者必樹伯迹

人の君しては智と盡く賢臣とて識政

昔周公躬吐握

之勞故有匡空之隆

賢者と登庸する賢者きり見んと請へ

齊桓庭燎之禮故有匡合

之功

齊の桓公侯臣と得て未だ庭燎と門外に設け

由此觀之君人者勤

於求賢而逸於得人

此に由て觀之に人の上に於て君

昔賢者之未遭遇也圖事揆策則君不用其

謀陳見悞誠則上不然其信進仕不得施效

斥逐又非其愆

君不用誠と陳見悞も君へ悞と不思進て仕まざる其功も

是故伊尹勤於鼎俎太公困於鼓刀

百里自鬻齊子飯牛離此患也

無加の伊尹も無道も伊尹も賢者少く其

食ふと意鼎又俎と勤と以て湯の庖人に仕んと請太公

聖主得賢臣

齊子ハ牛と飯此患に離る也

明君に遇聖主に遭

運至上の意に合諫

諍則聽見進退其

忠と閑し得任職

其術行し得昇

辱與潔と去て本朝

に升蔬と離驕釋

て膏粱と享也而

符と剖壤と錫て祖

考と光之と子孫に

傳て以説士と資

故世に世に必と聖

賢明之臣有故也

虎嘯而風冽龍興

而雲と致

蟋蟀秋と俟て吟

蟬蟬出に陰と以

易に曰飛龍天に在

大人と見利あり

詩に曰皇多士と

此王國に生

思故也に世平

主聖又將

望に後に文王感心せり人合れけり討王が暴虐を多し牛と飯に離る。其刀とくく宰割の爲。鳴管ふ困。又百里と

及至遇明君遭聖主也運

運至上の意に合諫

諍則聽見進退其

忠と閑し得任職

其術行し得昇

辱與潔と去て本朝

に升蔬と離驕釋

て膏粱と享也而

符と剖壤と錫て祖

考と光之と子孫に

傳て以説士と資

故世に世に必と聖

賢明之臣有故也

虎嘯而風冽龍興

而雲と致

蟋蟀秋と俟て吟

蟬蟬出に陰と以

易に曰飛龍天に在

大人と見利あり

詩に曰皇多士と

此王國に生

思故也に世平

主聖又將

及至遇明君遭聖主也運

得行其術去卑辱與潔而升本朝離蔬釋驕

而享膏粱

資説士

知之君而後有賢明之臣故虎嘯而風冽龍

興而致雲

蟋蟀俟秋吟蟬蟬出以陰

易曰飛龍在天利見大人

詩曰思皇多士生此王國故世平主聖俊又

將自至

又詩經の大雅の篇に

聖徳に

賢者と不召して自然に

賢者との進退の時

利あり

賢者との進退の時

利あり

賢者との進退の時

利あり

堯舜禹湯文武之君
 の親契皇陶伊尹呂
 望之臣と獲り多若
 明明と朝に在穆
 聚神と會して相得
 て益章とあり

伯牙遶鍾と操遶
 門子々鳥號と彎と
 雖も猶未以て其意
 と喻に足未也困
 故也に聖主に必賢
 臣と待て功業と弘
 俊士も亦明主と俟
 て以其徳と顯す

上下欲と俱ふ
 歡然と欣と
 交の千載一會論
 說疑無翼乎如鴻
 鴻毛の順風に遇
 如沛乎と巨魚
 の大壑に縱
 其意と得と此の如
 則胡と禁と止
 不易と令と不行不
 化四表に溢横に無
 意に被て遺夷貢獻
 是と以て聖主に徧

若堯舜禹湯文武之君獲親契皇陶伊
 尹呂望之臣明明在朝穆穆布列聚精會神
 相得益章

雖伯牙操遶
 鍾逢門子彎鳥號猶未足以喻其意也

故聖主必
 待賢臣而弘功業俊士亦俟明主以顯其徳

上下俱
 欲歡然交欣千載一會論說無疑翼乎如鴻

毛遇順風沛乎若巨魚縱大壑

其得
 意如此則胡禁不止曷令不行化溢四表横

被無窮遐夷貢獻萬祥必臻

是以聖主不徧窺望而視已

方々餘師

卷之三 聖主得賢臣等

三三二

天寶十四年安祿山洛陽陷

明年長安天子幸蜀

太子位即靈武

明年皇帝移軍鳳翔

京師復上皇

於戲前代帝王有盛德

若今大業歌頌

非老於文學其誰宜為頌曰

噫嘻前朝孽臣為妖

邊將兵毒亂國經羣生失寧

大駕南巡百僚竄身奉賊稱臣

天寶十四年安祿山陷洛陽

此ハ中兵の頌と書とての序也。天寶十四年

明年陷長安天子幸蜀

安祿山長安攻入する也。玄宗幸蜀の國の遠く出奔

太子即位於靈武

太子は靈武に即位す

明年皇帝移軍鳳翔其年復兩京上皇還

京師

於戲前代帝王有盛德

大業者必見於歌頌

帝王に盛徳を徳と具へたる者

若今歌頌大業刻之金石

蕭宗帝

非老於文學其誰宜為頌曰

噫嘻前朝孽臣為妖

邊將兵毒亂國經羣生失寧

大駕南巡百僚竄身奉賊稱臣

大駕南巡

大駕南巡

大駕南巡

大駕南巡

大君とて聲容
法云今斯
文に在不在

湘江の東西中伍
漢に直石崖天
齊磨可鑄可此
頃と形何千萬
年

○酒徳頌

劉伯倫

大人先生とて
有天地と以て一
朝
爲萬期と須臾
爲日月と肩牖
爲八荒と庭衢
爲

行に微跡無居に
室廬無天と幕し
地と席して意の
如所と縦

止則厄と操觚
執動則楹と挈
壺と提
唯酒は是と務焉

段七 能令大君聲容法云不在斯文
大君の徳ハ盛に與

福相つきて受あぐも事なれ年隔り後知人なり今
中興一具其容貌に現と芳聲と得と多とは斯のま
に至るまで水の流遠ふつとくは示し
書遺り外ハありて此頌と書記あり 段八 湘江東

西中直伍漢石崖天齊可磨可鑄刊此頌焉

何千萬年
此文章と紙ヤ編ふ書て八雲魚の養返り。幸に
永州府しつちふ湘のありそ正中ふありしは漢

○酒徳頌
此頌ハ酒の徳と美を
美極つて酒と以て飲樂とく多を備の
徳いふるも此頌の作者劉伯倫へよに酒と飲沈
と好し。其ふふ世の乱と命てくせハ此
に酒の氣遣はし。劉伯倫ハ竹林の七人の親

劉伯倫
竹林七賢人の一人ハ人ハ

段九 有大人先生以天地爲一朝萬期爲須臾

日月爲肩牖八荒爲庭衢
大人とて大人先生のいふハ
天地兩開りいふて一日

行無微跡居無室廬幕天席地
又萬期はては億年の久きも須臾は一瞬の
間とす。又晝夜とては日月ハ我形と入至天地と。唯
肩牖とては又八荒の野山のふとと我家の庭に載の
ふらひ又け本の衢とて自外内かの別ハ遠

縱意所如
四海と我家のふらふも從從無礙にんの如ふま
四時の所とて意の趣如所と縦はし

止則操厄執觚

動則挈楹提壺
止り居則ハ厄と執觚。動則ハ楹と挈
片手ふ壺の提け天性酒と好の

唯酒是務焉知其餘
一心不乱
酒と飲

んて其餘と知ん

貴介公子指紳

處士有て吾風

聲と聞て其所

以と議と

乃袂と奮ひ袵と攘

て目と怒り禮法と

陳説は是非鋒の

起

先生是に於て方に

覺と捧て槽と承て

杯と銜醪と漱鼻

と奮て踞踞て麴

と枕と糟と藉

思も無慮と多し

無其樂陶陶と

兀然と酔恍爾と

醒靜に聽し

雷霆之聲と聞不熟

視も泰山之形と見

不寒暑之肌と切に

嗜慾之情と感と

覺不

俯も萬物の擾擾

焉と觀て江漢之

浮萍の如し

二豪側侍し螺

贏之蟬吟與の如し

有貴介公子指紳處士

聞吾風聲議其所以

乃奮袂攘袵

怒目切齒陳説禮法是非鋒起

先生是に於て方に

捧覺承槽銜杯漱醪奮鼻踞踞枕麴藉糟

無思無慮其樂陶陶

兀然而酔恍爾而醒靜聽不聞雷霆之聲

熟視不見泰山之形不覺寒暑之切肌嗜慾

之感情

俯觀萬物擾擾焉如江

漢之浮萍

二豪侍側焉

如螺贏之與蟬吟

誠とんとて

我側侍し我に酒と

螺

蟬

吟

與

之

傳の類

五柳先生の傳

贏が小虫の螟蛉の子と多かり。類我の... 傳の類 傳といふ人の事跡と詳ふ化して後世に傳へる事

五柳先生傳

五柳といふ陶淵明... 種られ柳と名づくやうに自ら五柳と名づく

陶淵明

先生は何の許の人... 姓字と詳ふせず宅の邊に五柳樹有因以號と爲す

史記に司馬遷が自叙傳あり。又前漢書に陶淵明... 班固が叙傳あり

先生不知何許人亦不詳其姓字宅邊有

五柳樹因以爲號焉 其姓名字と詳ふせず宅の邊に五柳樹有

閑靖少言不慕榮利好讀書不求其解每

有意會便欣然忘食 先生の志す所閑寂と好む所安靖と

性嗜酒家貧不能常得 不圖自身の意に契にありて性嗜酒家貧不能常得

親舊知其如此或置酒而招之造飲輒盡期

在必醉既醉而退曾不吝情去留 先生の性酒

飲酒之快 醉ふに既に醉而退曾不吝情去留

環堵蕭然不 去留の二ツの意を加へる皆目不拘とする

日と蔽不短褐穿結
結て筆瓢空を
晏如也

常に文章と著
て自ら娛んで頗
巴志と示
懷と得失忘此
以自ら終

贊して曰黔婁言
有貧賤戚戚
ら不實に汲汲
ら不其言と極
茲若人の傳

酣觴詩と
賦以て其志と
之民歟葛天氏之
民歟

樹と種郭橐
駝傳

郭橐駝は如何
名と知不
僕と病隆然
伏て行橐駝に類
有者なり故に
郷人號し駝と曰
駝之と聞曰其

蔽風日短褐穿結筆瓢屢空晏如也

家僅に

環堵の修理と加ゆるべ凡と防も日と蔽も
荒屋と又着服も短褐も布も手入も一衣と
雜るるや次なる小の肩と膚又裾と肩に結撃又蓄する食
物も動くも一筆の食も一瓢の飲も空に盡した
掩るるも不惠の本心の天にかりて雲霧の
掩るるも不惠の本心の天にかりて雲霧の

頗示已志忘懷得失以此自終

常に詩文章と著

贊曰黔婁有言不戚戚於貧賤不汲汲於

富貴極其言茲若人之儔乎

周の末魯國の人に黔
婁先生の言

酣觴賦詩以樂

其志無懷氏之民歟葛天氏之民歟

種樹郭橐駝傳

實の郡守縣令の法度と頗

郭橐駝不知如何名

郭の氏橐駝は他

病僕隆然伏行有類橐

駝者故郷人號曰駝駝聞之曰其善名我固

當因捨其名亦自謂橐駝云

僕の背の曲る病

善我に名つて其の固に當り因て其名と捨て亦自ら橐駝と謂と云

其郷と豊樂と白郷と長安の西に在

駝の樹と種と業と

凡長安の豪家

富人の觀游と爲

及果と賣者皆爭

迎取て養視と

駝の種所の樹或は

遷徙とも活して且

碩に茂し蚤實て

以し蕃不とて

無他の植者の窺

伺て傲慕と雖も

能如し莫

之と問もの有は對て

曰橐駝は能木とて

壽するて日孳く

使に非能木之天に

順とて以し其性と

致焉爾也

凡植木之性其本の

舒と欲其培と

平らんと欲其土故と

欲其葉と密と

欲既に然已て動す

勿慮と勿去て

橐駝と云ふ素獸の名。此獸ハ形馬に似て背橐の如く肉高し。其郷曰豊樂郷在長安西

豊樂の西に在。駝業種樹凡長安豪家富人

爲觀游及賣果者皆爭迎取養視

本造の名人なり。凡長安の豪家とて。平人富人

とて業を造るもの我に呼んで養視する。駝所

種樹或遷徙無不活日碩茂蚤實以蕃他植

者雖窺伺傲慕莫能如也

有問之對曰橐駝非能使木壽且

孳也以能順木之天以致其性焉爾

凡植木之

性其本欲舒其培欲平其土欲故其葉欲密

既然已勿動勿慮去不復顧其時也若子其

置也若葉

凡木の性の人に曲らるるをせむが如きのまに

舒張と欲又人に培と

平らんと欲其土をせむが如きのまに

欲其葉と密と

既に然已て動す

勿慮と勿去て

橐駝傳

復顧不其時
子之若也其置之
棄若也

則其天者全而
其性得ん故也吾
其長也と害せ不
而已矣

能碩而之茂す
有に非其實と抑
耗さず而已能登而
之と蕃すも有
に非也也

他植者則不然不
根と拳而土易其
之培若過不
則及不也

苟能是に反する
有者則又之と愛
して太恩之と憂
太勤

且に視而暮撫已に
去而復顧
而に甚也其者其
膚に爪を以て其生枯
を驗其本を搖して
以て其疎密を觀而
木之性日以離矣

之と愛之曰雖も其
實之と害之之と憂
之曰雖も其實之
と離る故に我に若

と木に震する干要
勿。何と云ふんし
禁り。始植したる
害り。植畢して後
全而其性得矣故吾
非有能碩而茂之也
能登而蕃之也
而土易其培之也若
苟有能及是者則又
日視而暮撫已去而
而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

と木に震する干要
勿。何と云ふんし
禁り。始植したる
害り。植畢して後
全而其性得矣故吾
非有能碩而茂之也
能登而蕃之也
而土易其培之也若
苟有能及是者則又
日視而暮撫已去而
而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

全而其性得矣故吾
非有能碩而茂之也
能登而蕃之也
而土易其培之也若
苟有能及是者則又
日視而暮撫已去而
而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

非有能碩而茂之也
能登而蕃之也
而土易其培之也若
苟有能及是者則又
日視而暮撫已去而
而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

能登而蕃之也
而土易其培之也若
苟有能及是者則又
日視而暮撫已去而
而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

而土易其培之也若
苟有能及是者則又
日視而暮撫已去而
而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

苟有能及是者則又
日視而暮撫已去而
而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

日視而暮撫已去而
而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

而甚者爪其膚以驗
疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

疎密而木之性日以
之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

之雖曰憂之其實離
之故不我若也吾又

之故不我若也吾又

不我若也吾又

不我若也吾又

不我若也吾又

不我若也吾又

不我若也吾又

不我若也吾又

養師傳

四

雞鳴狗吠之其門
不出此士之至
不所以也

○碑の類

○潮州韓文公廟
の碑

蘇子瞻

匹夫而百世の師爲
一言而天下の法爲

是皆以天地之化に
參りて盛衰之運に

關し有其在すも也
自て來て有其迹也
爲所有故に申呂
嶽自降す

傳説の列星爲古
今の傳る所詎可
不也

孟子曰我善吾浩

一〇七 余市

雞鳴狗吠之出其門此士之所以不至也
思
類
善士の必定門に入證據が明かりなり
善士の必定門に入證據が明かりなり

○碑類

石の鑄つこと石碑といふ。想して人の徳ありしこと後
書傳へ或は山川小至して其所に記し
文のふいふを記す

○潮州韓文公廟碑

韓文公の唐の世の韓退之が
廟の木像と安置し祀る

世の出入神宅といふもの。韓退之が佛骨の表と書て憲宗
帝に上りし。逆鱗に中られ都より八千里をた潮州へ左

遷せられ後救とて朝廷に召還す。潮州ふなり。思
恩徳と不忘その徳と

蘇子の潮州の民と廟と建立し韓退之の死後も幸しく
蘇子の潮州の民と廟と建立し韓退之の死後も幸しく

蘇子瞻

匹夫而爲百世師一言而爲天下法

是皆有
身すれども大賢をふらふ。末世に庶人の師範とす
一句半言と吐き道に契るをに廣天下の法とす此師の

以參天地之化關盛衰之運其生也有自來

其逝也有所爲故申呂自嶽降

傳説爲
と具る處に之處の變を命ふ。國の盛衰の運命不關ふ
て世に生れ出づるも不徒自て來來するの由はるる

列星古今所傳不可評也

傳説爲
人の賢者死後に其氣天不昇りて列星とす
古今に傳ると又妄に誣惑すはちとす

孟子曰我善吾浩

然之氣と養とは氣也尋常之中に寓而天地之間に塞

卒然遇之に遇ハ王公其貴と失一晉楚其富と失一良平其智と失一儀秦其辯と失一是孰其使然使哉

其必も形不依て立不力と恃て行われ不生と待て存

せ不死に隨て亡せ不者有

故也に天に在る星辰と爲地に在る河嶽と爲幽則鬼神と爲明則復人と爲此理之常

東漢自以來道喪文弊異端並起唐の正觀開元之盛輔以房杜姚宋

善養吾浩然之氣是氣也寓於尋常之中而

塞乎天地之間浩然といふ大にまはるる氣也孟子曰人の禽獸に勝る天地人の三才と呼ぶ天地のふたれ

之王公失其貴晉楚失其富良平失其智貴育失其勇儀秦失其辯是孰使其然哉天地自

其必有不依形而立不恃力而行不待生而

存不隨死而亡者矣元來浩然の氣と具足しるもの人形に依りて卓然と

故在天爲星辰在地爲河嶽幽則

爲鬼神而明則復爲人此理之常無足恠者

故也に死しても形不つれ亡也彼浩然の氣は存して天の

幽暗からふ就ては鬼神と成る明白に露頭とる復人として

觀開元之盛輔以房杜姚宋而不能救東漢の

一〇八 余而

韓文公廟碑

四二

獨韓文公布衣起談笑而之塵
公に從正に復歸于此蓋三百年于此矣

文八代之衰起道濟天下之溺也

忠人主之怒犯

而勇三軍之帥豈非參天地之參乎
蓋嘗以謂人之辨論不至無惟天為不容不

詩文章の詞華言葉の... 聖人の古実... 房玄齡... 姚崇... 宋璟... 儒者... 聖教の道と輔教... 退之の貫道の志... 獨韓文公起布衣談笑而塵之

天下靡然從公復歸于正蓋三百年于此矣

前小房玄姚崇宋璟の四人ハ高用される人体て正道と救はれ得す

韓退之の布衣の賤なり起る身をて正道と塵に天下にくくに

塵然て韓文公に從ひて上古の正道ハ復歸す貫道の文章に教導す

文起八代之衰道濟天下之溺

漢魏晉宋齊梁陳隋ハ代の歷朝の間佛老の異端を興起す聖教の文起る

六經の文章久く衰へる韓文公出て導引ひて聖教の文起る

人主ハ憲宗帝とする唐の憲宗帝の時鳳翔府の法門寺に釈迦の指骨一節と安置す三十三日に開帳す

定まる年に當て豐年と傳へる天子聞きて元和十四年正月佛骨を内裏に藏す三日禁中に留置す華尊敬りて後官人と以て恭く送還す

上の御下必假凡俗を親王百官とする庶人入至すと佛骨の表也

と上り諫んを憲宗帝大に怒刑罰を行んとすと賢臣は韓退之を難と救んと言上する狂乱の意を言すも實ハ君に忠を言上す其罪と思ふ其人と惡むるの道理と以て君寬仁の德と用はれ殺害と免れて請ふ都とす逆の潮州へ九遷せれり

退之の君と堯舜の如くをしんと志ん丹誠の而勇奪三軍之帥豈非參天地之參乎

之帥此豈非參天地開盛衰浩然而獨存者

乎退之ハ文學の才のような武勇も勝る朝敵とする鎮州の王廷漢が陣に使はれて其三軍の勢と奪亂と靖しる大功ありくんの

所為の浩然の氣を天地の化に參りて國四基嘗論天人之辨以謂人無所不至惟天不容偽

辨以謂人無所不至惟天不容偽

智以王公と欺く
可以豚魚と欺く
不才以天下と得
可也匹夫匹婦
之心と得可く不

故公之精誠能
衡山之雲と開く
而憲宗之惑と回
不能鱷魚之暴
李逢吉之諂と彈
能

能南海之民に信
えて百世に廟食す
れ而も其身を使
一日朝廷之上に
安使能不便に

蓋公之能する所の
者天也其能す不
者人始潮人未
學を知未公進士趙
徳に命ず之が師
と爲困

是自朝之士皆文
行篤延齊民
及人に至る

議論熟思量すれば。智かと巧に用ひて勝つ所の所有ある上を
至運するなり。又天道の無私と以て、人々が私智と用ひて、
其欺き偽りたるを許容せらるる。智可以欺王公、不可以欺豚
魚、力可以得天下、不可以得匹夫匹婦之心、

魚力可以得天下、不可以得匹夫匹婦之心、
思慮専ら私智と用ひ、王公の貴を欺き、一旦欺き罔へたれども、天賦
の豚や魚と偽り味をばなれども、己の勢力と勵して、一朝に天下の
奪得し、はなれども、徳性として、匹夫匹婦を、
の下賤のものと懐得し、はかるとんたんとす。故公之精誠能開

衡山之雲、故公に退之の詩に、潮州と救して、歸り道中、山神と拜
神慮に契とく、人所以、暫時に凡起、
雲晴ぬる、衡山とて、得し、
而不能回憲宗之惑、能馴

鱷魚之暴、而不能弭皇甫鏘李逢吉之諂、
天徳と致かる、人、精誠の心とせざる、衡山と用ひ、天徳を、
帝の惑と回し、はるる、又潮州の民、鱷魚、惱とす、一首の詩と作

能信於南海之民、廟食百世、而不能使其身
一日安於朝廷之上、
韓文公の天徳ある、南海の民に信仰せん
死後も追慕し、廟と設らる、百世の末

者天也、其所不能者、人始潮人未知學、公
命進士趙徳爲之師、
衡山の雲と用、鱷と退る、天徳
の理、天も感ず、無造作に行ひ、

自是潮之士皆篤於文行、延及齊民、至于今
號稱易治、信乎孔子之言、君子學道則愛人、

韓文公の能する所の、人、人の私智、いん、
借又潮州の道とせ、知る、趙徳と師、一國と導き、
自是潮之士皆篤於文行、延及齊民、至于今

號稱易治、信乎孔子之言、君子學道則愛人、

韓文公の能する所の、人、人の私智、いん、
借又潮州の道とせ、知る、趙徳と師、一國と導き、
自是潮之士皆篤於文行、延及齊民、至于今

號治易之稱信

孔子之言君子道之學也則小人愛之小人道之學則使易也

潮人之公事也必祭水旱疾疫凡有求必禱焉

而廟在刺史公堂之後民以出入為艱前太守欲請諸朝作新廟不果

而小人學道則易使也

潮人之事公也飲食必祭水旱疾疫凡有求必禱焉

而廟在刺史公堂之後民以出入為艱前太守欲請諸朝作新廟不果

是邦凡所以養士治民者一以公為師民既悅服則出令曰願新公廟者聽民懽趨之卜地於州城之南七里期年而廟成

元祐五年朝散郎王君滌來是邦

凡士以養民者一以公為師民既悅服則出令曰願新公廟者聽民懽趨之卜地於州城之南七里期年而廟成

或曰國去千里而潮能一歲而歸沒而有知其不眷戀于潮也

其潮也

韓文公潮州碑

韓文公卒後潮州人文公

韓文公卒後潮州人文公

韓文公卒後潮州人文公

元祐五年朝散郎王君滌來守

是邦凡所以養士治民者一以公為師民既悅服則出令曰願新公廟者聽民懽趨之卜地於州城之南七里期年而廟成

或曰國去千里而潮能一歲而歸沒而有知其不眷戀于潮也

其潮也

裳

飄然ひらひら風かぜに乗のり

帝みかどの傍そばに來き

下した濁にご世よの與とも糝せ

糠ぬかと掃はき西にしの咸みな池いけに

游あそ杖つゑ桑くわと略りやく

艸くさ木き衣い被ひ了り昭しょう回かい

光ひかり

李り杜と追お逐と

參さん翽は翽は

汗あせ流なが

籍せき湜せき走は

日ひ僵じやう

滅め沒ぼつ

望ぼう

倒たう景けいに滅め沒ぼつ

望ぼう

書しよと作つくて佛ぶつと詆てい

君きん王わうと讒せん

海かいと觀くわん衡へい湘しやうと窺すゐ

英えい皇わうと弔てう

要えい

祝しゆ融じゆう先せん驅く

若じやく藏ざう鮫じゆう繩じゆう約じやく束しやく

如に

釣てう天てん人じん無む

帝てい

悲ひ傷しやう

詭き吟いん下げ

招しやうて

平へい陽やうと遣せん

遣せん

招しやうて

平へい陽やうと遣せん

遣せん

天帝の御と馳甲し手と伸て雲漢の水と扶揚、陰陽の雨晦明と天の

其の朝霞の光線、衣裳に供はれ、飄然乘風來帝旁下

與濁世掃糝糠西游咸池略扶桑

艸木衣被昭回光

追逐李杜參翽翽汗流籍湜走日僵滅沒

倒景不得望

作書詆佛護君

王要觀南海窺衡湘歷舜九疑弔英皇

祝融先驅海若藏約束鮫

鯁如驅羊

釣天無人帝悲傷詭吟下招遣

平陽

爆牲雞ト我
觴と羞む於芬丹
焦黃與と餐

公少も留
不我涕滂
翩然とて髮と
被て大荒に下る

悲傷り。斯帝之慕まらるべ。况や潮川山徳と慕ひて人。文公の精神と招下さんと求むる此詩と作廟前小謳吟祭す

爆牲雞ト羞我觴於餐芬丹與焦黃

ふけの爆と牛ととる。雞トマシ祈ふの言凶と驗。敵ふのの觴と神に羞む。於小芬丹の子の丹と昔産の美の

物更既解。今不も留我涕滂翩然被髮

下大荒 韓文公の徳と永く被らん。潮川の人。公に

復歸せられん。更に其澤と今に至りて思慕て。皆悲

大荒の上天より。被髮し。祭所の

志と享るんとを請ふなり

